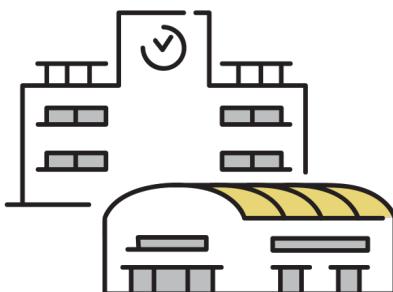
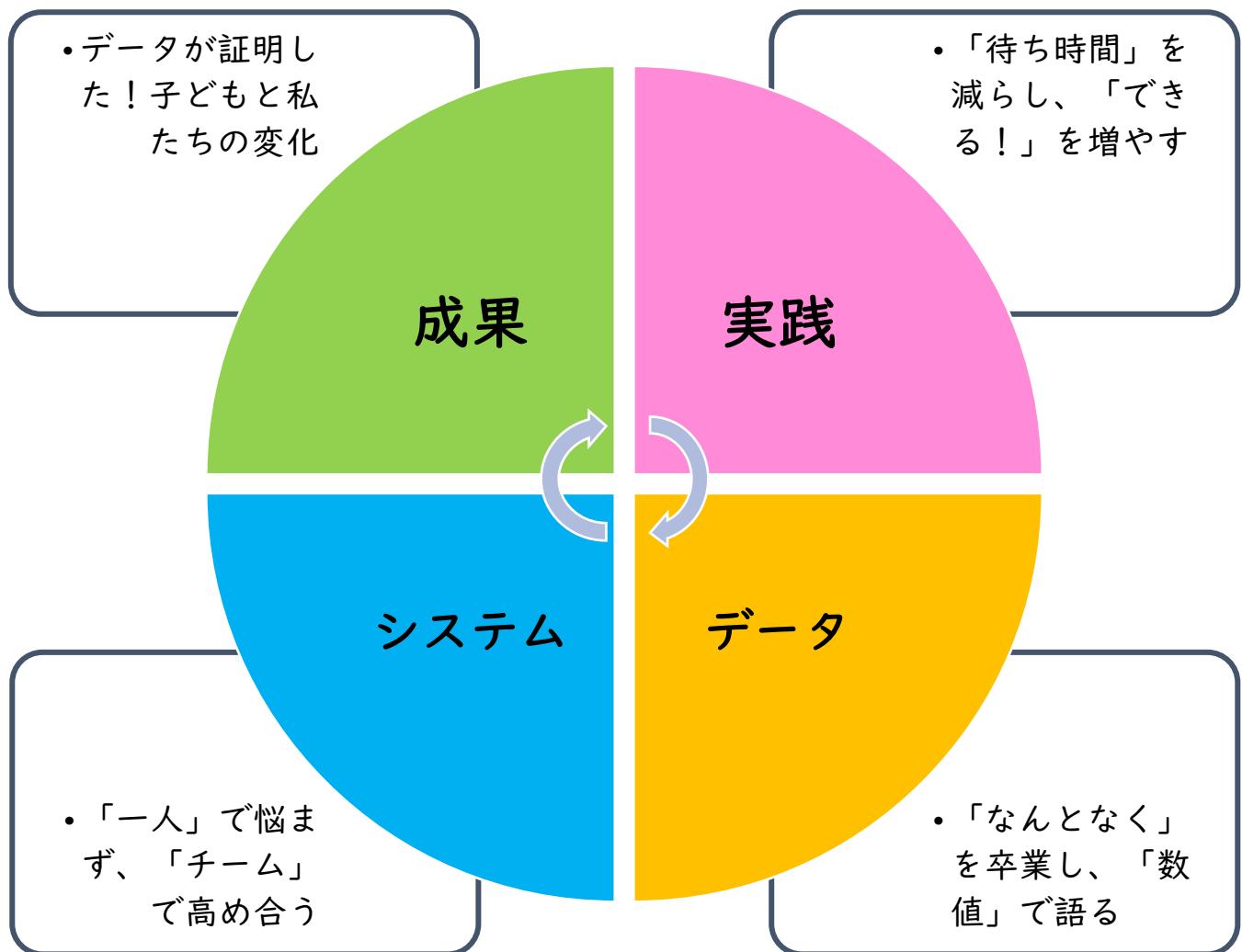


データで変わる、授業が変わる、子どもが輝く！

～SWPBS（学校全体でのポジティブ行動支援）に基づく授業の充実～



兵庫県立むこがわ特別支援学校で
学校規模ポジティブ行動支援の実践

実践

～「待ち時間」を減らし、「できる！」を増やす～

1. 環境設定の工夫：一方的な説明する時間を減らし、子どもたちの活動の機会を増やしました。できなかつたときにも、すぐにプロンプト（ヒント）を提示しました。

2. 即時の強化：「できた」瞬間に間髪入れず褒めたり認めたりすることで、ポジティブな行動を定着させました。



データ

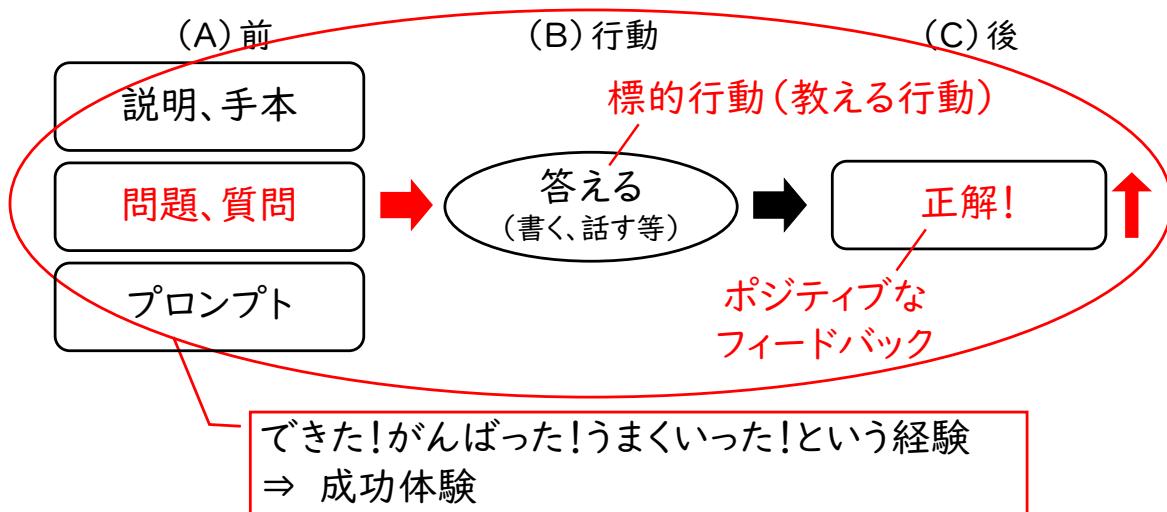


～「なんとなく」を卒業し、「数値」で語る～

1. 活動時間：子どもが手持ち無沙汰にならず、実際に動いている時間は何分か？
2. 学習機会：「質問→応答→強化」のサイクル（ラーンユニット）は何回あったか？
3. 強化回数：私たちは授業中に何回、子どもを褒めたり認めたりできたか？

☆授業の中で教える行動に関する成功体験（正解のラーンユニット）をできるだけ増やすことが、ポジティブ行動支援に基づく授業づくりのポイントです！

○正解のラーンユニット（成功体験）



システム



～「一人」で悩まず、「チーム」で高め合う～

1. 動画を用いた授業検討：授業の動画をデータ化し、そのデータに基づいて活動や教材などの見直しを行った。
2. 共通言語の獲得：「もっと頑張ろう」ではなく、「ランユニットを増やそう」という共通の言葉で語り合えるようになりました。

成果

～データが証明した！子どもと私たちの変化～

☆活動時間（従事時間）が最大 2.4 倍 に！

ただ座っている時間が減り、生き生きと課題に取り組む姿が増えました。

☆強化回数（褒めた数）が最大 4.6 倍 に！

学習機会を増やしたことで、自然と子どもを認める場面が激増しました。



～先生たちの声～

授業改善の効果は、グラフの数値だけではありません。実際に現場で子どもたちと向き合っている先生方の「実感」こそが、本研究の成果を最も雄弁に語っています。「感覚」から「根拠ある実践」へ。アンケートに寄せられた声からは、確かな手応えと指導への自信が読み取れます。

「数値化がやっぱり全員にとってわかりやすいです。意識しないと変わらないけれど、意識すれば自然と変わるのがおもしろいです。」（高等部 教員）

褒める質を良くしたり、回数を増やしたりしたいと思っていたので、共有できて良かった。子どもたちがどう反応するか楽しみ。（小学部 教員）

「称賛が多くなると教員もポジティブに授業ができている感じがしました。」
（中学部 教員）

理解しているかどうかを確認する際には、口頭での返答ではなく「できた」という行動の結果から判断することが大切であると学びました。（高等部 教員）

学校研究の成果

データが証明した、私たちの「授業力」と子どもたちの「輝き」
～この1年で見つけた授業アイディア集～



I. 全員参加・同時反応の工夫（「待つ」から「やる」へ）

- ・小学部 → リズム・具体物で一斉反応 手遊びやリズムに合わせて全員で反応したり、具体物を全員で同時に操作したりする。
- ・中学部 → 手元教材・ICTで常時参加 一斉指導中も個別の手元教材（手先の作業など）やタブレットを持たせ、常に手と頭を動かす。
- ・高等部 → ホワイトボードで回答の可視化 口頭だけでなく、ホワイトボードに書いて掲げることで、全員が能動的にアウトプットする。

2. 学習行動の増加と構造化（活動サイクルの短縮）

- ・小学部 → テンポアップと短縮 指示を端的にし、授業の進行テンポを物理的に早めて集中を持続させる。
- ・中学部 → 隙間時間の活用 待ち時間に「予習・復習」を挟んだり、課題が終わった生徒から個別に先生に見せに行ったりするサイクルを作る。
- ・高等部 → ペースの個別化と分散 「グループ活動」と「個別学習」の時間を分けたり、丸つけの時間をずらしたりすることで待機時間を減らす。

3. 教材と支援ツールの工夫（成功体験の保証）

- ・小学部 → 興味・関心と視覚構造化 触りたくなる「楽しい教材」を用意し、仕切りや皿を使って置く場所を分かりやすくする。
- ・中学部 → 選択肢の提示 「お願いします」「質問などのセリフ」を定型化したり選択肢や質問カードを選んだりできる。
- ・高等部 → メディア活用と難易度調整 電子黒板の画面や動画を使って意欲を引き出しヒントや見本を提示して正解率を高める。

今年度の研究を通じて、私たちは「経験」に「データ」という新たな武器を加えることができました。動画を撮り、数値を測る作業は、決して楽なものではありませんでした。しかし、そのプロセスを経て得られた「子どもたちの変化」と「指導への確信」は、何物にも代えがたい本校の財産です。2年間のPBSに基づく実践という強固な土台ができた今、私たちは次のステージへと進みます。学校全体での支援を階層支援モデルに基づき子どもが必要な支援を提供します。これからも、「データ」を羅針盤に、「チーム」で支え合いながら、「自分らしく学び、自分らしく輝き、自分らしく翔く」子どもたちの未来を創造してまいります。（教務情報部研究研修推進課）

実践パンフレットリンク先：

